

《論 説》

古代イベリア半島のケルト・アイデンティティ

疋 田 隆 康

論文内容の要旨

従来のケルト研究において、古代イベリア半島のケルト人は、その特殊性と劣悪な史料状況から、取り上げられることが少なかった。しかし、近年の研究の進展により、この地の重要性が明らかになりつつある。そこで、本稿では、ケルトイベリア（おおよそ、現在のイベリア半島中央部、メセタと呼ばれる高原地帯に相当）を対象に、特にケルトイベリア戦争時とローマ帝政期に焦点を当て、彼らのアイデンティティに着目しながら、ケルトイベリア社会の実態を検討した。

具体的には、ヌマンティアの指揮官レトゥゲノスとビルビリス出身の諷刺詩人マルティアリスの2人を取り上げ、両者のアイデンティティの考察と、ケルトイベリアの宗教の検討、特に神々への信仰の分析を行った。その結果、ケルトイベリア戦争期にはケルト的要素を保持していたケルトイベリアは、1世紀になると、人々はまだケルト・アイデンティティを保持しながらも、同時にローマ人としての自覚を獲得しつつあり、彼らのアイデンティティは複合的なものになっていたという結論に達した。さらに、この状況がケルトイベリアの独自性が失われる端緒となったという見通しを示した。

はじめに

従来のケルト研究において、古代のイベリア半島は、特殊な地域として忌避されることが多かった¹⁾。しかし、近年の研究の進展により、この地の重要性や文化の高さが明らかになってきた。

このイベリア半島のケルト人について、イベリア半島中央部の人々は、ケルトイベリア人とも呼ばれている。この地域のケルト人の起源には諸説あり、未だ定説はない²⁾。イベリア半島の地中海沿岸部には、古くからギリシア人の植民市があり、その後、カルタゴ人も進出した。ローマ人が到来する前から、彼らとケルトイベリアとの交流が知られており、遅くとも、紀元前3世紀にはケルト人はケルトイベリアに居住していたものと思われる。ギリシア・ローマの古典史料の記述によれば、ケルト人は土着の人々と混血し、ケルトイベリア人と呼ばれるようになった³⁾。このケルトイベリアの領域については、それぞれの古典史料によって異なるため、諸説あり、厳密に定めることは困難である⁴⁾が、おおよそ、現在のイベリア半島中央部、メセタと呼ばれる高原地域に相当する。なお、本稿では、単

に「ケルトイベリア」と表記する場合にはこのイベリア半島中央部の地域のことを指し、この地域に居住するケルト人を指す場合には、「ケルトイベリア人」「ケルトイベリアの人々」というように表記する。

ローマ人は、紀元前3世紀よりこのイベリア半島へ勢力を拡張し始め、紀元前197年、属州ヒスパニア・キテリオルとヒスパニア・ウルテリオルを設置した。その後、ケルトイベリア戦争（紀元前155-133年）、ルシタニア戦争（紀元前155-139年）によって、イベリア半島の大部分を征服し、最終的にはアウグストゥスの下、紀元前27年、北西部ガリシア地方が征服され、続くカンタブリア戦争（紀元前26-19年）によってイベリア半島全域を支配下に組み入れた。

これらの中でも、ケルトイベリア戦争は、ヌマンティア（現ソリア近郊）の長年にわたる抗戦で名高い。ローマ軍は、紀元前153年、ヌマンティアを包囲したが、攻囲戦は20年続き、紀元前133年小スキピオによってようやくヌマンティアは陥落し、ケルトイベリア全域がローマの支配下に入ることになった。

ところで、ケルトイベリアの史料状況は極めて劣悪であるが、ケルトイベリア戦争に関しては、ケルトイベリアにとって重大な事件であっただけでなく、ローマにとっても重要な出来事であったため、他の時代と比較して、若干ではあるものの、恵まれている。ケルトイベリアに関する主な文字史料は、ギリシア語、ラテン語の古典文献、ラテン碑文、ケルトイベリア語碑文である。古典文献はストラボンやアッピアヌスが比較的纏まった記述を残している他、リウィウス、プリニウス、ディオドロスなどの記述が主なものである。いずれも断片的な上に、それぞれの記述が食い違っていることもしばしばあり、利用には慎重を期す必要がある。イベリア半島全体から出土したラテン碑文は、19世紀末までに約7000枚が知られていたが、現在ではその数はおおよそ2倍になっているといわれる⁵⁾。しかし、碑文の与えてくれる情報は限られたものである上、多くは地中海沿岸、バエティカなどから出土したものであり、これらの史料だけではケルトイベリアの社会について十分に考察することは難しい。一方、ケルトイベリア語碑文は現在までに約90例が知られているに過ぎないが、ケルト人自身が作製しているという点で、史料的价值は大きい。もっとも、断片的なものが多く、現段階では十分に解読されていないのが難点である。

このような史料状況を鑑み、本稿では、比較的史料の集中しているケルトイベリア戦争時とローマ帝政期に焦点を当て、特にアイデンティティに着目しながら、ケルトイベリア社会の実態を検討する。ケルトイベリア戦争時とローマ帝政期との間に、人々のアイデンティティがどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのか。このようなケルトイベリアの人々のアイデンティティを考察することは、イベリア半島のケルト社会が、ローマの征服によりどのような変容を蒙ったのか、明らかにする手がかりとなるであろう。なお、「アイデンティティ」という言葉については様々な議論があるが、本稿では、アイデンティティという言葉に含まれる多様な側面の中でも、特に人々の集団及び地域への帰属意

識という面を重視し、この語を用いる。また、ケルトイベリアに居住するケルト人をケルトイベリア人と呼ぶが、冒頭で述べたように、ケルトイベリアの領域画定が困難である以上、「ケルトイベリア人」という言葉にも曖昧さが付き纏わざるを得ない。「集団及び地域」と表現したのは、このようなケルトイベリアの状況を鑑み、ケルトイベリアという地域とケルトイベリア人とを、少なくとも現段階では、切り離して捉えるのは適切ではないと考えられるからである。

ところで、ケルトイベリアのアイデンティティを考える際に問題となるのが「ローマ化」である。ガリアなど他の属州に比べて、ケルトイベリアのローマ化に焦点を当てた研究は乏しいが、イベリア半島のローマ化について触れている研究をいくつか挙げてみよう。リチャードソンは、ローマ軍の駐屯とそれに伴うローマと属州住民との接触およびローマの属州住民に対する責任の増大が、属州での法や税制、都市の整備をもたらしたとする。そして、スペインでは、この変化はハンニバル戦争とスッラの時代の間に起こったという⁶⁾。一方、サリバンは、ケルトイベリアのローマ化はカエサル及びアウグストゥスによる植民市の創設によって進展し、アウグストゥスの死後、ローマ化進展のペースはスローダウンしたものの、ウェスパシアヌスの治下で再び加速していったと述べている⁷⁾。さらに、ミースによれば、建築の研究からローマ化の進展度合いによって、スペイン全土は地中海沿岸部、ケルトイベリア、北部沿岸部の3つの地域に分けられ、地中海沿岸部では紀元前1世紀終わりまでにローマ到来以前のアイデンティティがほぼ完全に失われ、ローマ化した⁸⁾が、ケルトイベリアは土着のアイデンティティが完全に失われることはなかった⁸⁾。

実はこれらの諸研究は、イベリア半島のローマ化やケルトイベリアのアイデンティティを主眼とした研究ではなく、ローマ時代のイベリア半島に関わる重要な研究書の中から、本稿の主題に関係する部分を取り出したものに過ぎない。現在までのところ、このテーマについての専門研究は、近年カーチンの出版した著書がほとんど唯一のものである。カーチンは、先ず「ローマ化」概念について、従来の考え方を大きく5つのタイプに分類している。1つ目は、ローマ人が征服後ローマ風の生活や文化を持ち込み、現地の人々に押しつけた、とするモデルで、旧来のいわゆる「ローマ化」概念に相当する。2つ目と3つ目に分類されているのは、いわば最初のモデルを裏返したもので、現地の人々がローマ風の生活や文化を自発的に模倣した、あるいは、ローマ風の生活を採用したのはエリート層だけであった、とする考え方である。そして比較的新しい、ローマの文化と現地の文化が互いに影響を与え合ったとするモデル、あるいはローマの文化と現地の文化が融合して新たな文化が生まれたというモデルが4番目と5番目に分類されている。これらのうち、彼は最後の、ローマの文化と土着の文化が相互に影響し合い、融合し、新たな「属州」文化を生み出すことという考え方を採用し⁹⁾、この前提の下、ケルトイベリアのローマ化について総合的に考察を加え、アイデンティティに関しては、ローマ風の名前が採用され、ラテン碑文を残していることやローマの神々に奉献碑文などを捧げていることを重視している。

そして、ケルトイペリアのローマ化を容易にした要因は、パトロネジ、客人歓待、奴隷制など共通の要素が多かったためという¹⁰⁾。

このカーチンの研究は、「ローマ化」概念の捉え方こそ近年の議論を踏まえ、旧来とは異なるものになってはいるが、既にケルトイペリアにおいて「ローマ化」が起こったことを前提として議論を進めている。しかし、「ローマ化」をどのような現象として捉えるかは取り敢えず置いておくとして、「ローマ化」が起こったということの検証、つまりローマ征服以前と以降の変化について、ローマ風の都市が造られ、ローマ風の遺物が出土しているなどの旧来の「ローマ化」概念を支持する事実の他に、どのような変化があったのか、必ずしも十分に検討がなされているとは思われない¹¹⁾。そこで、本稿では、この点も含めて、まずはケルトイペリア戦争時のこの地域、特にヌマンティアの人々のアイデンティティから考察を始めたい。

第1章 ヌマンティアの貴族

ケルトイペリア戦争の末期のこととして、アッピアヌスは次のような記述を残している。「包囲された敵たちは、もはや武具も援助も来ないので、長い間守ることも支えることも出来ないとスキピオは考えた。ヌマンティアの人、カラウニオスと呼ばれたレートゲネースはヌマンティアの貴族の中で最も高貴な者であったが、5人の友人たち¹²⁾を説得し、同数の奴隷及び馬とともに、曇りの夜、自軍とローマ軍の間に、折り畳んだはしごを持って密かに出て行った。彼と友人たちは、壁へやってきて跳び越え、それぞれ見張りを殺し、従者を送り返した。はしごによって馬を持ち上げ、アレウァキ族の町ヘオリブの枝を持って、彼らの同族ヌマンティア人のために援助を求めて馬に乗っていった。アレウァキ族は彼に耳を貸さず、すぐに逃げ込んできた者たちを送り返した。」¹³⁾

ケルトイペリアにおいて、個人名はほとんど知られていないが、ここに出てくるレートゲネースという人物については例外的に複数の史料で言及されている。ケルトイペリア戦争時の人物であり、さらにその出自がケルト人であることがほぼ確実である。そこで、本章では、ケルトイペリア戦争時のこの地域の人々のアイデンティティについて、具体例としてレートゲネースを取り上げ、その分析から、ケルトイペリアの人々の意識を推測するという方法で考察を進めていきたい。

ヌマンティア陥落に関するフロルスの記述では、ヌマンティアの人々は「最後に指揮官ロエコゲヌスによって、自分たち自身、及び祖国と近隣の至る所を、剣、毒、火によって、破壊した」¹⁴⁾となっている。このロエコゲヌスは、アッピアヌスの言うレートゲネースと同一人物と考えてよいであろう。とすると、レートゲネースはローマ軍の囲みを突破してアレウァキ族の援助を求めに行ったものの果たせず、再びヌマンティアに戻り、最後までローマ軍に対する抵抗を指揮し、自らヌマンティアを破壊するよう命じたということにな

る。

一方、ウォレリウス・マクシムスには2カ所レートゲネースに関連すると思われる記述がある。1つ目はヌマンティア陥落の際の記述である。

「ロエトゲネスは全ての住民に対して名声、財産、名誉の点で優っていたので、ヌマンティア人のものを放棄し、打ち壊し、至る所に火の糧となるものを集め、この都市において最も美しかった区画を燃やし、すぐに短剣を間に置き、互いに二人ずつ一騎打ちをし、負けたものは首を切られ、燃えている建物に投げ込まれるよう命じた。彼は、全員の死という激烈なやり方で破壊した後、最後には彼自身が火の中に沈んだ。」¹⁵⁾

もう1カ所は、紀元前143年の出来事を記した箇所、ケントブリガ出身のロエトゲネスがローマ軍へ逃亡したことを述べている¹⁶⁾。同様の記述が、エジプトのオクシュリンコスから出土したラテン語パピルスにある。「クイントゥス・メテッルス（クイントゥス・カエキリウス・メテッルス・マケドニクス）とアッピウス・クラウディウス（アッピウス・クラウディウス・ブルケル）が執政官だった年（紀元前143年）、ケントブリガの住民は、逃亡したレトゥゲネスの子供たちへ弩砲による襲撃を行った。」¹⁷⁾ シュルテンは、ここに出てくるレトゥゲネスは、アッピウスヌスのレートゲネース、フロルス伝えるロエコゲヌスとは別人であろうという。もしこれらが全て同一人物であったとすると、紀元前143年にはローマ側についていたレートゲネースが、10年後にはヌマンティア側の指揮官として最後までローマ軍に徹底抗戦した、ということになる。『ガリア戦記』などにもローマ側についていた人物が寝返る例があり、可能性は否定出来ないが、現在の史料状況では確認出来ない。以上で紹介したレートゲネースについての古典文献での記述を纏めると、ケルトイペリア戦争の末期、ヌマンティアの指導者にレートゲネース（ロエコゲヌス、ロエトゲネス）という人物がおり、紀元前133年のヌマンティア陥落時に町と運命を共にした、ということになる。紀元前143年ケントブリガに同名の人物が存在したことが伝えられているが、この両者が同一人物であるかどうかは分からない。

碑文に目を転じてみると、エラメリューリ（Heramelluri）出土のラテン碑文¹⁸⁾にはレクトゥゲネスの息子ティトゥス・マギリウスなる人物が現れ、アルマドロネス（Almadrones）出土の碑文¹⁹⁾には同じくレクトゥゲネスの娘アッタなる人物が現れる。もしこのレクトゥゲネスがレートゲネースと同一人物であるなら、彼には少なくとも子供が2人おり、この2人はヌマンティア陥落後、ローマ風の生活を受け入れたものと考えられる。それは2人がラテン語で墓碑を残していることと、ティトゥスという名前を持っていることから明らかである。

レクトゥゲノスという名前はガリア出土の碑文からも知られている。フランス西部フェグレアック（Fégréac）出土のウェヌス像の背面には、ラテン文字ガリア語で、Rextugenos²⁰⁾ Sullias avvot²¹⁾と刻まれており、ホルダーやエリス・エバンズによれば、rectuはアイルランド語recht、ラテン語rectusなどと同じ語源で「法」を意味し、genosは

ラテン語genus, ギリシア語γένοςに対応し, 「法の子」というような意味になるだろうという²²⁾。従って, もしこのレクトゥゲネスがローマ側に付いていたロエトゲネスと同一人物, あるいはレートゲネースともロエトゲネスとも別の人物だとしても, レクトゥゲネスという名はケルト系の名であり, ケルトイベリア出自の人物が子供にはローマ風の名前を付け, その子供がラテン語で墓碑を残しているという事実は, ケルトイベリア戦争後, それほど時を経ずしてケルトイベリア人がローマの風習を取り入れ, ローマ風の生活を送っていた例と考えることが出来る。

ケルトイベリア語の碑文には, レトゥゲノスという名前が4回現れている²³⁾。そのうち2回は歓待の札²⁴⁾である。この歓待の札というのは, 契約を結んだ両者が, その印に一つの板を2つに分け, それぞれを持っていたもので, いわば符丁のようなものである。これは, 多くが動物の形をしており, それぞれに契約当事者の名が記されている。現在までに約20例出土しているが, ササモーン (Sasamón) 出土の歓待の札²⁵⁾には, irerekiosという名が出てくる。ウンターマンの解釈²⁶⁾によれば, この名前に含まれているrekというのは, アイルランド語のrí, ガリア語のrixなどと同じ語根で, 王や高貴な身分を示している。出土数や, この例から, これらは比較的富裕な階層に限られていたものと思われる。これらのレトゥゲノスがアッピアヌスのレートゲネースと同一人物であるとすれば, 彼はヌマンティアのみならず, 他の共同体にも知られた有力な人物であったことになり, またそうでなかったとしてもレトゥゲノスという名は歓待の札が2例残っていることから有力な貴族の名と考えられ, アッピアヌスの「ヌマンティアの貴族の中で最も高貴なもの」という記述を裏付ける。なお, この歓待の札には2つの機能があり, 1つは符丁としての役割, もう1つは所持者の身分を証明する役割である。

レトゥゲノスが現れるケルトイベリア語碑文のうち, 最も重要なものは, 1992年にサラゴサ近郊のボトリータ (Botorrita) から出土した碑文である²⁷⁾。ボトリータからは, 1970年及び1980年にもケルトイベリア語碑文が出土しており, 1992年出土のものは3つ目のものということになる。このボトリータ第3碑文は, 1番上に2行にわたって簡単な説明があり, その下に4欄にわたって約200の人名が刻まれている。最上部に刻まれている説明の内容は移民に関するものであるが, 人名の羅列してある部分が本文に比して非常に長いため, 本文の内容よりもむしろこの人名リストが重視されていたと考えられている²⁸⁾。

この碑文は, 紀元前93年に起こった, デイディウスによるケルトイベリア人の抹殺に対応している, という説もある²⁹⁾。もしそうであるなら, ここに出てくるレトゥゲノスがヌマンティアのレトゥゲノスと同一人物である可能性は低い。

以上の史料に関する紹介と考証を整理しておこう。上に言及したうちで, ほぼ確実に同一人物であると見なすことが出来るのは, アッピアヌスのレートゲネースとフロルス・ロエコゲヌス, 及びウェレリウス・マクシムスの, ヌマンティア陥落時に登場するロエトゲネスだけである。しかし, ラテン碑文に現れるレクトゥゲネスやケルトイベリア語碑文の

レトゥゲノスは、ローマ支配下で、ローマの習慣がケルトイベリアにも導入され始めている中でも、ケルト系の名を持ち続けていたことに加え、さらにケルトイベリア語碑文に現れるレトゥゲノスの場合、自分たちの言語をも保持していたことから、ケルトのアイデンティティを持ち続けていたことが認められる。

ケルトイベリア戦争時から、戦争後しばらくの間にかけては、ケルトイベリアにおいて、ケルト的要素が保持されていた。ローマの習慣、例えばローマ風の名前、書記文化など、を取り入れ、次第にローマ風の生活が浸透し始めてはいたが、それはまだ物質文化の段階に留まり、帰属意識を塗り替えるところまでは入り込んできていなかったと考えられる。

第2章 マルティアリスのアイデンティティ

本章では、1世紀イベリア半島出身の諷刺詩人マルティアリスの詩を史料として、ローマ帝政期のケルトイベリアの文化状況とそこに住む人々のアイデンティティを論じる。

マルクス・ヴァレリウス・マルティアリスは、40年頃³⁰⁾ イベリア半島のビルビリスで生まれた。64年にローマへ移住し、諷刺詩人として名を上げるが、98年に故郷ビルビリスへ戻り、隠遁生活に入り、104年頃没したといわれる。古代において、故郷に隠遁するというのは極めて珍しいことである。これが彼のアイデンティティを考える1つの鍵になると思われる。この98年というのは五賢帝の一人トラヤヌス帝が即位した年であり、マルティアリスの隠遁は政治的な理由と捉える向きも多い。

マルティアリスの諷刺詩は、現在12巻にまとめられている³¹⁾。これらはマルティアリス生前に刊行されたもので、第1巻が出版されたのは86年頃、最後に刊行されたのは第12巻で101年頃と考えられている。つまり、マルティアリスの活動期はドミティアヌス帝の治世であり、彼の詩の中にはドミティアヌスに献呈されているものもある。96年、ドミティアヌス帝の暗殺後、ネルウァ、続いてトラヤヌスが即位すると、ドミティアヌス帝の下で庇護を受けたものたちは冷遇されることとなった。そしてマルティアリスはネルウァ、トラヤヌスからの庇護は望めないと判断し、ビルビリスへ隠遁したと考えられている³²⁾。マルティアリスの隠遁の理由を政治的なものとみるのはこのような時代背景からである。

しかし、ハウエルは、このような見解を否定し、マルティアリスの隠遁は、むしろクリエンテスとしての務めに飽いたからであることを示唆する³³⁾。また、彼の隠遁を故郷へのノスタルジーに帰する見解も存在する³⁴⁾。マルティアリスの隠遁について、古典文献では小プリニウスに記述がある。その書簡は、マルティアリスの死について述べているのであるが、そこではマルティアリスがローマを離れるときに小プリニウスが餞別を贈った旨、記されている。しかし、隠遁の理由については何も述べられていない³⁵⁾。マルティアリスの生涯については、彼の詩の中に現れる断片的な記述がほとんど唯一の史料であるが、彼の隠遁の理由に関しても、そこから推測する以外にはない。

ところでマルティアリスはその詩の中で何度か、自分をケルト人と呼んでいる。1つは、第7巻に収録されており、次のような表現が見出される。

「ケレルは我が同族ケルト人とヒベル人を治めたが…」³⁶⁾

この詩を含む第7巻は、92年に出版されている³⁷⁾。ドミティアヌス帝の治世下であり、マルティアリスはまだローマに滞在していた。

もう一つは、次のようなものである。

「我がケルト人のところへ、マケルよ、そして野蛮なヒベル人のところへ、あなたのいない悲しみとともに私は行くだろう。」³⁸⁾

また、彼は自分の故郷ビルビリスに誇りを持っており、この詩が収録されているのと同じ第10巻では、生まれ故郷への愛着を隠そうとしない。この第10巻は、最初95年に出版されたが、その後、ビルビリスへ隠遁する直前の98年、増補・改訂を施した第2版が出版された³⁹⁾。これら、ケルト人としてのアイデンティティやビルビリスへの愛着を表している詩が初版から収録されていたのか、第2版で追加されたのかは分からないが、第4巻にも「私たちはケルト人とヒベル人から生まれ」⁴⁰⁾とあり、第10巻が出版される以前から自分のケルト出自を述べている。また、ビルビリスを誇りに思っていることは、既に最初に出版された第1巻以来窺うことが出来る⁴¹⁾。

政治的な事情も彼の隠遁の1つの要因ではあったかもしれないが、彼の故郷への愛着の強さを考えると、彼の隠遁は、むしろ素直に望郷の念に駆られた結果と見なしてよいのではないだろうか。そしてそのような見方が許されるならば、マルティアリスのケルト出自に対する誇りと併せて考えると、彼がケルト・アイデンティティを保持していたと認めることが出来るだろう。

次にマルティアリスの生まれたビルビリスという町から、彼のアイデンティティを見てみたい。元々、ビルビリスは外部との交流が盛んなところであった。そのことは、ビルビリス鑄造のものを含むケルトイペリアのコインが、イペリア半島北西部のガリシア、南部のシエラ・モレナなどからも出土していること、イペリア半島外からの人々を含む、移民の存在が知られていることなどから明らかである。このような背景もあり、ローマ支配下では、ビルビリスは自治都市の法的地位、及びアウグスタ・ビルビリスの称号を得ていた。また、ビルビリスの行政官とその家族は、完全なローマ市民権を有していた。マルティアリスがその階層に属していた可能性は十分にある⁴²⁾。この地方では有数の文化的都市であり、マルティアリスの他にも幾人かの詩人を輩出している他、図書館や本屋の存在も知られている。

このような背景からマルティアリスの詩を見てみると、ローマ市民権を持っていることを誇りに思っている節があり、彼の詩からは、彼が騎士身分に叙せられていたことも分かる⁴³⁾。当然のことながら、マルティアリスの中にはローマ人としての自己意識も存在していた。このようにケルト人としてのアイデンティティを保持しながらも、彼の内面にはロ

ーマ人としての自己意識も存在していた。

もし、マルティアリスが、ローマ人としての意識とケルト人としてのアイデンティティと、どちらにより愛着を感じていたのか示すことが出来れば、ローマ支配下でのケルトイベリアにおけるアイデンティティについて、貴重な例となろう。これは単純な二者択一に帰せられる問題ではないが、彼の詩において、ローマ人としての誇りを語るよりも、ケルト人としての誇りやビルビリスへの愛着を語る方が、頻度において優っている⁴⁴⁾。例えば、第1巻には「ケルトイベリアの人々によって言及されないことはなく、我がヒスパニアの誇りであるリキニアヌスよ、あなたは馬と武具で高名な、高貴なビルビリスを見るだろう」⁴⁵⁾とあり、また第10巻にも同じ「高貴なビルビリス」という表現が用いられている⁴⁶⁾。さらに、隠遁後に書かれた詩⁴⁷⁾では、ビルビリスでの隠遁生活の素晴らしさが述べられている。このように、文筆活動の初期から晩年まで、終始一貫して、マルティアリスはビルビリスへの郷土愛を示している。このことは、マルティアリスの本心はどうかであれ、少なくとも自分をそのようなものとして他人に示したいと考えていた証左となるであろう。マルティアリスの詩は生前に出版されており、特定のサークル内だけで披露されたものや出版を意図しないで書かれたものではないからである。マルティアリスは、同じイベリア半島出身の哲学者セネカほどではないにしても、属州出身者としてはローマで成功した人物ということが出来る。マルティアリスの生まれたビルビリスは、ケルトイベリアの中では比較的「ローマ化」が進展していた都市であり、コルドバのようなより「ローマ化」された地域の出身であるセネカとは異なるものの、マルティアリス自身恐らく富裕階層としてローマ風の生活にある程度親しんでいた。にもかかわらず、それでもなお、彼はケルト人としてのアイデンティティを保持していた。そうであるなら、彼ほどローマ風の生活に親しんでいなかった、ケルトイベリアの大部分の人々の間では、なお根強くケルト・アイデンティティが存続し続けたと考えられる。

紀元1世紀のケルトイベリアにおいては、人々はまだケルト的要素を保持しながらも、同時にローマ人としての自覚も芽生えつつあり、彼らのアイデンティティは複合的なものになりつつあったと言うことが出来るであろう。つまり、当時のケルトイベリアの人々は、従来のケルト的アイデンティティを保持していたが、それと同時に、ローマの統治下にあることからローマ人としてのアイデンティティも彼らの内面には存在し始めていた。そして、これらケルトのアイデンティティとローマのアイデンティティは、片方が他方に同化したり、両者が融合し新たなアイデンティティを生み出したりすることなく、併存していたのである。

ケルトイベリア語の保持といった、土着の伝統を守ることを通じて、単純にローマ化したのではなく、精神的な面では保守的であったと言える。文学の面で、これが顕著に現れているのが、マルティアリスであろう。彼は自分がケルトイベリアの末裔であると主張し、そのことを誇りにさえしている。彼が体现しているのは、ケルト的要素とローマの要素が

併存していた1世紀ケルトイベリアの状況である。

第3章 ケルトイベリアの「ローマ化」

これまでの2章において、ケルトイベリアのアイデンティティについて、ケルトイベリア戦争時には、ローマの影響は物質文化に留まり、ケルトのアイデンティティが保持されていたこと、紀元1世紀、マルティアリスの場合にも、ケルト・アイデンティティはまだ保たれており、同時にローマ人としてのアイデンティティも持ち合わせた、複合的な状況にあることを見てきた。以上の考察を踏まえた上で、ケルトイベリアの社会が、このアイデンティティの変化に伴い、どのように変化していったのか、ケルトイベリアの宗教、特に神々への信仰の点から見てみたい。

ストラボン⁴⁸⁾は、ケルトイベリアでは名のない神が信仰されていたと述べており、プルタルコスによれば、マリウス派の將軍セルトリウスが、ルシタニア（現在のポルトガルを含む、イベリア半島西部に相当する地域）へ招かれた時、彼は白い鹿を神の使いと人々に信じさせ、人心を掌握した⁴⁹⁾。これらの例からは、ケルトイベリアで信仰されていた神々は、当初人間の形を取っていなかったと推測される⁵⁰⁾。ローマ時代には、古典の様式で神々の姿を現した像やレリーフなどが見つかったことから、神々の姿が具象化されたこれらの図像はローマの影響によるものと考えられる⁵¹⁾。

奉獻碑文からは、ケルトイベリアでは、エポナやマトロナエ⁵²⁾など、ケルト人に共通する神々への信仰がローマ帝政期まで存続していたことが知られている。マトロナエに関する碑文は現在までに12例が知られており、それらのうち6例はエピセツを伴っている。それはbrigiace⁵³⁾, gallaicae⁵⁴⁾, endeiterae⁵⁵⁾, monitucinaei⁵⁶⁾, nothae⁵⁷⁾, tendeiterae⁵⁸⁾であり、最後のものを除いて、全てクルーニア（Clunia）で出土したものである。また、しばしばマトロナエと同一視されるNymphaeは、valcilenaeというエピセツを伴っている⁵⁹⁾。これらのエピセツのうち、brigiaceとgallaicaeはそれぞれ「Brigiacaの守護者」「ガリシア地方の守護者」を示すものであり、これらの女神は土地の守護神と考えられていた可能性が高い。

その他のケルトの神々では、ルグが知られている⁶⁰⁾。ルグへの信仰を示している史料は、2つのラテン碑文とペニャルバ・デ・ビリヤスタール（Peñalba de Villastar）出土のラテン文字ケルトイベリア語の碑文である⁶¹⁾。このうち、ペニャルバ・デ・ビリヤスタール出土の碑文は、直接にルグへ捧げられたものではなく、土地の奉納と保護を求めるのに、ルグを喩えに出しているものである⁶²⁾。この碑文から、ルグへ土地を捧げたり、土地の保護を求めたりすることが行われていたことが分かる。一方、2つのラテン碑文のうち、セゴビア（Segovia）から出土した碑文⁶³⁾には、アンノヌス・ルグディアクスの息子ウァレリウスという人物が現れ、ルグディアクスという名がルグへの信仰を示していると考えられる。

この碑文からはルグ信仰について、具体的な情報は得られない。それに対して、もう一つのウクサーマ (Uxama) から出土したラテン碑文⁶⁴⁾は、靴職人の組合に属するものによって捧げられた奉獻碑文である。従って、ケルトイベリアでは、ルグは特に職人によって崇拝されていたと思われる。さらに、奉獻者はルキウス・リキニウスというローマ風の名前の者であることから、ローマの風習を受け入れつつあった住民が、なおケルトの信仰を保持していたと見なしてよいであろう。

土着の神々への信仰としては、アビラ (Avila) 周辺から出土したローマ時代の奉獻碑文を見ると、約半数の10例が土着の神Velicusに捧げられている⁶⁵⁾。しかしこの神は他ではまったく知られていない⁶⁶⁾。このうち、奉獻者の名前が分かるものが6例ある⁶⁷⁾が、そのうちの4例は女性と思われる。この神の起源も、いつ頃から崇拝されていたのかも分からない。ローマ人の名前も見られることから、ケルト起源の神と考えるよりは、むしろアビラ周辺のローカルな神で、その役割が女性に関わりのある神と考える方が適切であろう。

これらの他にも多くの土着の神々の名が知られているが、カーチンによれば、ケルトの神々は次第にローマの神々とのシンクレティズムにより、ローマの神々の名で信仰されるようになったとされる⁶⁸⁾。実際、ケルトイベリアで出土した奉獻碑文には、ディアナ、ヘラクレス、ユピテル、マルス、メルクリウス、ミネルヴァなどのローマの神々が現れる。では、これらの神々の神性が、ケルトイベリアの人々からどのように認識されていたのか、言い換えれば、ローマ人（あるいはギリシア人）と同じように捉えていたのか、それとも土着の神々がローマ風解釈によってラテン語の名称で呼ばれているに過ぎないのか、次にこの点をエピセットを検証することで考察してみたい。ケルトイベリアの場合、これらの神々がエピセットを伴って現れるケースは少ない。例えば、マルスへの奉獻碑文は14例が知られているが、そのうちエピセットを伴っているのは2例に過ぎず、その2例も *augustus*⁶⁹⁾ と *magnus*⁷⁰⁾ であり、土着の神々とのシンクレティズムを示すようなものではない。メルクリウスへの碑文は6例知られているが、エピセットを伴っているのは2例で、これも *augustus*⁷¹⁾ と *ocniorocus* で、ディアナは16例中1例 (*domin*)⁷²⁾、ミネルヴァは7例中1例 (*augusta*)⁷³⁾ など、他の神々についても同様の傾向が現れている。

ガリアでも同様の神々への信仰が知られており、ガリアの事例との比較は、ケルトイベリアの信仰を理解する参考となるであろう。ガリアでは、これらの神々は、しばしばエピセットを伴って現れる。特にメルクリウス、マルス、ヘラクレスは数十のエピセットが知られており、それらのエピセットは、言語で分類するなら、*magnus*⁷⁴⁾ などラテン語のものやラテン語起源のもの⁷⁵⁾ などもあるが、ケルト語起源のもの、あるいは構成要素の中にケルト語の要素を含むものの方がより多く、また、エピセットの意味するところで分類するのなら、割合が最も高いものは地名である。従って、ガリアでは、これらの神々は、土着の神々が、その機能の類似から、メルクリウスやマルスといったローマの神々の名の下に収斂され、信仰されていたものであり、エピセットはかつての土着の神々を示す名残と考

えられる⁷⁶⁾。

しかし、ケルトイベリアの事例はガリアのように解釈することは出来ない。エピセットを伴っている例が少ない上、伴っている場合でも、そのエピセットはaugustusやmagnusといったラテン語起源のものであり、そこには土着の神々との習合というような現象を見出すことは出来ない。従って、ローマの神々は土着の神々とは切り離されたものとして、別個の神々として認識され、信仰されていたと考えるのが適当であろう。さらに土着の神々に目を向けてみるなら、ガリアの場合、土着の神々が、メルクリウスなどローマの神々のエピセットとしてではなく、単独で出てくる時、その出土例はほとんどが1例、2例であり、5例以上のものは知られていない。それに対して、ケルトイベリアでは、上で紹介したVelicusという神の例では、10例の奉献碑文が知られている。このような個々の土着の神々への奉献碑文の多さは、ローマの神々と土着の神々が習合したり、融合したりしておらず、切り離されたまま別個のものとして信仰されていたことを裏付けるものであろう。

また、エボナやルグなど、ケルトの神々への奉献碑文がローマ時代にも作製されており、それらの数はローマの神々への奉献碑文と大きくは変わらない。エピセットの少ないことと併せて考えるならば、これらの事例も、ケルトの神々とローマの神々とが別個のものとして信仰されていたことを示していると言えるだろう。

前章では、マルティアリスについての考察から、紀元1世紀のケルトイベリアでは、人々のアイデンティティはケルトのアイデンティティとローマ人としての自覚を併せ持つ、複合的なものになりつつあったことを見てきた。ケルトイベリアの信仰についても同じことが言えるのではないだろうか。

つまり、ガリアとは異なり、ケルトイベリアでは、ケルトの信仰とローマの信仰とは、相互に影響を与え合いながらも、なお分離したままであったと考えられる。本稿冒頭の研究史の検討において、カーチンによる「ローマ化」概念の分類を紹介したが、カーチンは、ローマの文化と土着の文化が融合して新たな文化が生まれたという前提で、ケルトイベリアを見ている。しかし、少なくとも、アイデンティティや宗教に関する限り、当時のケルトイベリアはとうていそのような状態ではなく、ローマの文化とケルトの文化が相互に影響を与えながらも、融合までいならず、混在しながら共存していたものと思われる。

おわりに

ローマの弁論術の勅任教師に任命されたクインティリアヌスは、30年頃に生まれ、マルティアリスとはほぼ同時代に活動した、ケルトイベリアのカラグリス出身⁷⁷⁾の人物であった。しかし、マルティアリスとは対照的に、彼の著作からは、そのイベリア出自を見出すことはほとんど出来ない。彼はマルティアリスより先にローマへ来ており、マルティアリスの詩には、次のようにクインティリアヌスに呼びかけたものがある。「クインティリアヌスよ、

彷徨う若者を巧みに御す者よ、クインティリアヌスよ、ローマのトガの栄光よ」⁷⁸⁾ また、小ブリニウスも彼の生徒の一人であった⁷⁹⁾。これらのことから、当時クインティリアヌスが既に名声を博していたことが窺われる。ヌマンティア陥落から200年ほどの間、ケルトイベリアのアイデンティティや文化は、ローマの影響を受けながらも保持されていた。しかし、クインティリアヌスのような例からは、ローマの影響が確実に浸透し始めていたことが窺える。紀元1世紀以降、ケルトイベリアでは、ローマ征服以前のケルト的要素の痕跡がほとんど見だせなくなる。これらのことから、ケルトイベリアの文化とローマの文化が融合して新たな文化を生み出す前に、両者の力関係から、ケルトイベリアの独自性は次第に消えていったと考えられるのではないだろうか。

註

- 1) 例えば, Jacobsthal, P., *Early Celtic Art* vol.1, Oxford, 1944 (rep.1969), p. V, p.163など。明示されていないが、イベリア半島出土の碑文に用いられた独自の文字やケルト、カルタゴ、ギリシア、ローマなど様々な文化の流入により形成された造形美術の独自性などが、イベリア半島が「特殊」とされた理由と思われる。
- 2) ケルトイベリアの起源について、最も著名なものはいわゆる"invasion" theoryであろう。この点に関しては, Almagro-Gorbea, M., "The Celts of the Iberian Peninsula", in Moscati, S. et al. (eds.), *The Celts*, Milan, 1991, p.391を参照。仮説自体については, Bosch-Gimpera, P., "Two Celtic Waves in Spain", *PBA* 26, 1940, pp.25-147を参照。
- 3) Lucanus, 4.10など。中世でも、ベルンに保存されている、ルカヌスへの古注やIsidorus, *De Etymologiae*, 9.2.114などにこれらの記述が受け継がれている。これには異論もあり、元来、ケルトイベリアというのは、ヒベル川（現エブロ川）流域のケルト人が居住しているところを指す地理的概念であった、という説もある。
- 4) Zamora, J. M. J. (ed.), *Historia de España Menéndez Pidal* I-3, Madrid, 1954, pp.198-227, Lorrio, A. J., *Los Celtíberos*, Madrid, 1997, pp.33-52, Mozota, F. B., *Los Celtíberos*, Barcelona, 1998, pp.14-64などを参照。
- 5) Gorrochategui教授の示唆による。なお、イベリア半島以外の属州でも同様の状況である。例えば、ガリア・ナルボネンシスに関しては, P.-M. DuvalによるGascou, J. et al., *Inscriptions latines de Narbonnaise* vol.1, Paris, 1985の序文を参照。
- 6) Richardson, J.S., *Hispaniae*, Cambridge, 1986, p.180.
- 7) Sullivan, J.P., *Martial: the unexpected classic*, Cambridge, 1991, pp.174-175.
- 8) Mierse, W.E., *Temples and Towns in Roman Iberia*, Berkeley and Los Angeles, 1999, p.300.
- 9) Curchin, L. A., *The Romanization of Central Spain*, London and New York, 2004, pp.8-14, 彼は5つのタイプをDominance model, Self-Romanization model, Elite model, Interaction model, Integration modelと呼んでいるが、彼が自分の考えに最も近いとするのは5番目のIntegration modelである。
- 10) *Ibid.*, pp.117-143
- 11) ローマ時代のイベリア半島に関する従来の研究が、「ローマ化」を自明の前提としてきたことは、その背景などとともにKeayによっても指摘されている。Keay, S., "Romanization and the Hispaniae", in Keay, S.&Terrenato, N. (eds.), *Italy and the West*, Oxford, 2001, pp.118-122を参照。
- 12) これを彼の庇護民と取る解釈もある。本稿での議論には影響しないので、差し当たり字義通りに訳しておく。
- 13) App., *Iber.*, 94.
- 14) Flor, 1.34.15.

- 15) Val. Max., 3.2.ext.7.
- 16) Val. Max., 5.1.5.
- 17) Schulten, A., *Fontes Hispaniae Antiquae* vol.4, Barcelona, 1937, p.34, なお、括弧内は本稿筆者の補い。
- 18) *Corpus Inscriptionum Latinarum* (以下CILと略) II 2907.
- 19) CIL II 6294.
- 20) ガリア語において、ギリシア文字χは帯気音を表す。従って、カタカナ表記としては「レフトゥゲノス」のほうが近いと思われるが、これはケルトイベリア語とガリア語の発音上の違いに過ぎないため、本稿では説明が煩雑となるのを避け、「レクトゥゲノス」に統一する。この点に関しては、Lambert, P.-Y., *La langue gauloise* 2nd ed., Paris, 2003, p.46を参照。
- 21) *Recueil des inscriptions gauloises* (以下RIGと略) L 22A.
- 22) Evans, D.E., *Gaulish Personal Names*, Oxford, 1967, p.109, pp.203-207, pp.241-242, Holder, A., *Alt-celtischer Sprachschatz* 3vols., Leipzig, 1891-1913.
- 23) K.0.9, K.0.14a, K.1.3, K.12.1.本稿でのケルトイベリア語碑文の出典表記はUntermann, J., *Monumenta Linguarum Hispanicarum IV: Die tartessischen, keltiberischen und lusitanischen Inschriften*, Wiesbaden, 1997に拠っている。
- 24) 歓待の札については、Ramos Loscertales, J., "Hospicio y clientela en la España céltica", *Emérita* 10, 1941, pp.308-337, Dopio, M.D., "El hospitium celtibérico: Un mito que se desvanece", *Latomus* 48-1, 1989, pp.19-35, Lorrio, A. J., *op. cit.* pp.323-324, 拙稿「古代ケルト社会の『祭司と剣』『古代王権の誕生』第4集, 角川書店, 2003, 305～308頁などを参照。
- 25) K.14.1.
- 26) 前の注で引用したK.14.1の項を参照。
- 27) K.1.3.
- 28) この碑文に関しては、Lambert, P.-Y., "Le territoire celtibère: essai de définition", *Mélanges de la Casa de Velázquez* 35-2, 2005, pp.45-74を参照。
- 29) この事件に関しては、App., *Iber.*, 100に詳しい。
- 30) マルティアリスの生年は、彼の詩の記述から38から41年の間とされる。詳しくは、Sullivan, *op. cit.*, pp.1-2を参照。
- 31) 13巻, 14巻は諷刺詩ではなく、エレゲイアである。
- 32) Watson, L.&P., *Martial: select epigrams*, Cambridge, 2003, p.4.
- 33) Howell, P., "Martial's Return to Spain", in Grewing, F. (ed.), *Toto Notus in Orbe*, Stuttgart, 1998, pp.183-186.
- 34) Watson, L.&P., *op. cit.*, p.4.
- 35) Plinius, *Ep.*, 3.21.
- 36) Martialis, 7.52.
- 37) Sullivan, J.P., *op. cit.*, pp.39-40.
- 38) Martialis, 10.78.
- 39) Sullivan, J.P., *op. cit.*, pp.44-52.
- 40) 4.55.8.
- 41) 例えば, 1.49など。
- 42) Watson, L.&P., *op. cit.*, p.1.
- 43) 3.95.
- 44) 上記のケルトに言及している3箇所その他, マルティアリスがビルビリスに言及しているのは5箇所。それに対し, ローマ人としての意識を示唆している箇所としては, 3.95などが挙げられるに過ぎない。
- 45) 1.49.
- 46) 10.104.
- 47) 12.18.

- 48) 3.4.18.
- 49) プルタルコス「セルトリウス伝」11, 及び20.
- 50) Rankin, H. D., *Celts and the Classical World*, London, 1987, p.170.
- 51) ガリアでも同様のことが看取される。拙稿「古代ガリア社会におけるケルトの伝統」『史林』86巻第4号, 2003を参照。
- 52) マトロナエは, 碑文にはmatronae, matres, matraeなどの名称で現れる。この地域で出土しているものは, 全てmatresであるが, 現在ローマ帝国内で出土している碑文ではmatronaeが最も多く, これらは同一の神格と考えられるので, 本稿ではマトロナエに統一する。
- 53) CIL II 6338l.
- 54) CIL II 2776.
- 55) *Hispania Epigraphica* (以下HEpと略) 2, 85b.
- 56) Abásolo, J.A., *Epigrafía Romana de la región de Lara de los Infantes*, Burgos, 1974, No.206.
- 57) *L'Année épigraphique* (以下AEと略) 1988 769.
- 58) AE1988 768.
- 59) CIL II 3067.
- 60) スペインでのルグ信仰については, Toval, A., "The God Lugus in Spain", *BBCS* 29, 1982, pp.591-599を参照。
- 61) CIL II 2732, CIL II 2818, K.3.3.
- 62) この碑文は, ラテン文字で7行にわたって記されているもので, 土居敏雄氏は, 『言語学大辞典』のケルトイベリア語の項で, 「余はここにTignusのTiatusのために(名代として)囲い地をルグ神に捧げり。われらは作地を委託す。余はまたエクアエソスにも(捧げり。)畑地, 耕地, および納屋が捧げられんことを。ルグ神にティアソスの講社と穀倉を。」というH.Schwerteckの解釈と, 「われらはルグ神に畑地を捧げることくエニオロスとTignusのTiatusに畑地を捧げる。オグリスはルグ神に開墾地の保護を託することくエニオロスとエクアエソスに農地の保護を委託する。」というケデリッチの解釈を紹介している。亀井孝他編『言語学大辞典』三省堂, 1988, 1620~1621頁を参照。
- 63) CIL II 2732.
- 64) CIL II 2818.
- 65) Knapp, R.C., *Latin Inscriptions from Central Spain*, 1992, p.405.
- 66) ルシタニアからは, Endovelicusに捧げられた碑文が3例(CIL II 5209a, AE1992 938, HEp 3 477)出土しているが, この神とVelicusの関係は明らかでない。
- 67) 6例の内訳は, ケルト系の名前と土着の名前, ローマ人の名前がそれぞれ2例ずつとなっている。このうち, 土着の名前2例を除いては, 全て女性の名前と思われる。
- 68) Curchin, L. A., *op. cit.*, p.178.
- 69) CIL II 6305.
- 70) Knapp, R.C., *op. cit.*, n.181.
- 71) CIL II 2819, なお, HEp 4, n.365に収録されているメルクリウスへの奉獻碑文は, 欠損部分にaugustusというエピソードを補われている。
- 72) CIL II 6338mm.
- 73) Palol, P.d.&Vilella, J., *Clunia II: La epigrafía de Clunia*, Madrid, 1987, n.18.
- 74) Mercurius magnus (CIL XIII 11535) .
- 75) 例えば, Mercurius domesticus (CIL XIII 7276, 7757) など。
- 76) この点について詳しくは, 拙稿「古代ガリア社会におけるケルトの伝統」63~94頁を参照。
- 77) 16世紀にはローマ生まれとする説もあったようであるが, 現在ではカラグリス生まれというのが定説となっている。Cousin, J. (ed. et tr.), *Quintilien, Institution oratoire* t.1, Paris, 1975, p.vii-ixを参照。
- 78) 2.90.
- 79) Plinius, *Ep.*, 6.6

《 English Summary 》

Celtic Identity in the Iberian Peninsula

Takayasu Hikida

The purpose of this paper is to reveal characteristics of Celtic society in Spain through the consideration of identity in Celtiberia. Until recently, Celtiberian studies have been dominated by the presupposition that Romanization took place: after the Roman conquest of Celtiberia, the Celtiberians were romanized and lost their Celtic identity. This assumption now needs to be explored and challenged.

The Roman conquest of the Iberian Peninsula began in the late third century BC and was completed in 19 BC under the reign of Augustus. Through an investigation into the historical records of Retugenos, the Celtiberian chief in the fall of Numantia, the author of this paper firstly shows that during the Celtiberian war, and for some time afterwards, the Celtiberians still preserved their identity, even though Roman customs began to be introduced into Celtiberia.

Secondly, the author discusses the case of Martial, an epigrammatist from Bilbilis. Martial insisted upon his Celtiberian origins although he seems to have had Roman self-consciousness, too. In his epigrams, we can see his pride in having Roman citizenship. His identity was, consequently, complex or mixed. Judging from the case of Martial, we can see that concepts of a Celtic identity had been preserved in Celtiberia at least until the first century AD.

Thirdly, the author investigates religion in Celtiberia. The complex situation of the religion in Celtiberia is discussed through research into the cults of deities. The religious situation corresponds to the circumstance of both identity and cultural context in Celtiberia. The Celtiberian culture and the Roman culture coexisted in a separated condition, neither mixed nor united. The Celtiberians shared two complex identities: Celtic and Roman. But, under Roman influence, Celtiberian culture disappeared little by little before the reconciliation of both cultures.